

天理教と現代社会の生死観：死

おやさと研究所員
安井 幹夫 Mikio Yasui

死について

人は生きていく限りいつかは死ぬ。生きて生き抜いたその先に「死」がある。しかも死を経験した人はいない。それだけに古来より、死についてはいろいろなことがいわれてきた。三途の川を渡ると、えんま様がまっている。そこで極楽行きと地獄行きが振り分けられるとか。そんな素朴な話はいまでは過去のものに違いない。最近では、医学の進歩により、生と死の境界線そのものがあいまいになりつつある。

臓器移植を推進する人たちにとって、できるだけ早い時期に臓器をとりだしたい思いは強い。ある方が倒れられた。それは「脳幹出血でたすかる見込みはありません。」脳死という診断だった。けれども心臓が動き、血色もよい。意識はないとはいえ、そんな方が「ダメです」といわれても、にわかには信じがたい。なんとか救ってもらいたいと、おたすけに通ったがどうにもならなかった。いまから30年ほど前の話である。あの状況で、臓器移植という話を受け入れることは難しいように思ったのは事実である。そこに安楽死(尊厳死)の問題もでてくる。しかも、その死の捉え方はさまざまである。

死ねば、われわれはどこへいくのか。神に召されるという教えもある。ジハードに名を借りたテロ行為で自爆した者、その家族を含めて、神からのご褒美があると信じられている。だから死に急ぐ。いろいろな事柄が次々とわき起こってくる。自らの命を懸けるということは、人間として究極の態度、行いと見なされるだろう。

日本においては、お迎えがくる、あるいは長旅に出る、という表現をして、なんだか通過儀礼のような言い方をすることもあつた。生と死がどこかで繋がっているような見方である。その点、ヨーロッパあたりの、厳しい断絶を示す見方とは異なる。

ただ問題は、お迎えがくる、という表現は、おそらく年齢を重ねた人が、ゆっくりと安らかに死ぬ場合に、当てはまる言い方であろう。若い元気な子どもが事故で死ぬ。同じ一つの死であるが、その波紋の広がり異なる。悲しみの深さも異なることは自明である。それだけに死の受け止め方は、死の状況によって異なる。

ただ、こうした死の捉え方に共通していることは、個体の死である。一方、もっと時間軸を拡大して考えてみれば、人は生まれ、死に、また生まれる。そうした時間の流れの中で、人の死は繰り返す。死があつて、ものごとが保たれる。人の誕生ばかりでは、人類は破綻する。その意味で、人の死は自然のこととして受け入れる必要がある。死を個的なものから類的なものへと捉えるところに、死は生へと昇華されていく。いのちの連鎖がそこにあらわれてくる、そんなことが言えないだろうか。

もちろん、こうした考え方は、最近とくに宣伝されている、

アンチエイジングとは別の問題である。いつまでも若く、元気で。悪くない。でもどこかおかしいぞという気がする。老いとか死がどこかに追いやられて、人々の目からそれらを隠そうという傾向がある。家族葬が多くなってきているのは、そのせいでないか。人間は年齢を重ねれば、弱る。これが自然だ。それを受け入れていく。そして生きて生きて、生き抜くところに、安らかな死を迎えることができるのではないか。



さらにいえば、幾つで亡くなるろうとも、みな同年とおっしゃる。「小さくても大きくても同い年や、八十で死ぬ者もあれば二歳で死ぬ者もある」(高野友治著作集第6巻186頁)と。また『稿本天理教教祖伝逸話篇』187にも、「さあ〜小児のところ、三才も一生、」と仰せられている。死を迎える年齢はそれぞれである。しかし、人間の元はじまりから考えれば、同年だ、という意味であろう。今世は3歳で完結していると考えられるのである。

ところで、本教では死のことを出直しという。おやさ様がそのように仰ったのか。そんなことを考えてみる。というのは、明治20年までの文献に「出直し」の語がみられない。わずかに、「みかぐらうた」に「こゝろえちがひはでなほしや」と歌われているが、それは、死を意味するものでなく、いわゆる出直してくるの意である。

こふき話では、例をあげると、「しにいくやないかりものかやす」「しぬるとゆうハきものふをぬぎすてるのもおなじ事なり」といわれている。あるいは、「みなはてしまい」「みなはてしまい」「かくれまし」「しにたへる」「人間ハ死ニ行ナンゾトユケレド シヌヤナイ、カリ物カヤス、ソレシラズ、ナンゾ死ヌヨウニヲモテイル、などと表現されている。その点については、いずれ考えてみたい。

平成28年度
公開教学講座のお知らせ

今年度の公開教学講座は、9月からの開講を予定しています。会場は、例年のとおり天理教道友社6階ホールになります。

詳細は、本誌次号以降で改めてご案内いたします。今年度も多数のみなさまのご来場をお待ちしています。